

「さあ、ここからは教科書に出てないからね」。4月下旬、大阪府貝塚市立東山小学校で行われた市川伸一・東京大学教授(57)の特別授業。この日初めて「円の直径」を学んだ3年生に、授業の残り15分で出された課題は、「折れない厚紙の円の中心点を見つけてコマを作る」だった。

物差しと三角定規を使って直径を何本か書き、その交点を中心点であることを見つける発展的な問題。子どもたちは班ごとに顔を寄せ合って議論に夢中になった。45分の授業でここまで到達するのは、前半で「直径は中心点を通る」などの基本知識を丁寧に確認したからこそだ。

同小は昨年度から、市川教授が提唱する「教えて考えさせる授業」を、算数を中心に導



No 1453

教育ルネサンス やる気のコツ 9

応用へ丁寧な基本解説

入した。目標は「授業のユニバーサルデザイン」(誰にでも優しい設計)。児童の学力差が大きい公立校共通の悩みが出発点だった。先取り学習をしている子もいれば、教科書を読んだだけでは分からない子もいる。子どもの理解度

に注目し、全員のやりがいを指す方針に共感した。基本の流れは予習から。教科書の分からないところに付箋を張り、新しい知識は解説や例題まで先生が丁寧に教える。基本知識の使い方を確認してから発展問題に挑戦。こ

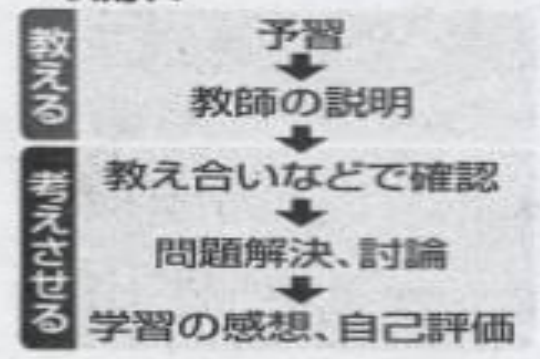
こで子どもたちが「面白い」と思う問題を出せるかが先生の腕の見せ所だ。子どもたちが教え合う活動も多く入れる。人に説明することも理解度のチェックになる。

東山小はこの授業に合わせ、見開き2ページを四つの枠に分けた独自の「かがやきノート」も作った。深井利恵子校長(54)は「授業の見通しが持てる安心感があり、復習もし



厚紙の円の中心点を見つける問題で、自分たちの考えを発表する子どもたち。右が市川教授(4月28日、貝塚市立東山小で)

「教えて考えさせる授業」の流れ



やすい」と手応えを語る。長年、子どもの学習相談を続けてきた市川教授が、「習得の授業の基本設計」として提案したのは10年前。詰め込みへの批判から「教えずに考えさせる」授業に極端に傾いたのに危機感を覚えていた。例えば、英語で会話テープは聞くが発音記号や口の形は教えない。算数・数学では公式や定理を自力で発見させようと議論して授業が終わる。身についた実感を持てず、新たな「勉強嫌い」も生んでいた。当初は「詰め込みの復活では」と誤解も反発も強かったが、小中学校への全国行脚を続けるうち、自治体ぐるみの取り組みも増えた。「なるほど、と思うのが勉強の醍醐味。理解する喜びを引き出した」。子どもたちが「面白い」と身を乗り出す姿が原動力だ。(片山圭子、写真も)